

昭和56年
7月18日
内水試
かわら版
2号 (46)

表-1 酸欠観測結果 7/17

地奥	表層		底層		透明度 m
	水温	DO ppm	水温	DO ppm	
田余	31.0	16.4	28.2	5.8	0.3
下玉里	30.6	14.5	28.1	1.2	0.35
小津	29.8	10.4	27.6	1.5	0.8
内水試	29.0	10.6	26.0	0.2	0.8
田伏	29.0	12.4	25.8	0.25	0.8
牛賀	28.7	8.4	25.7	0.4	1.0
五助田	28.0	9.4	26.0	0.7	1.3
麻生	27.8	9.4	26.0	0.8	1.35
湖心	28.0	10.2	26.1	1.2	1.25
牛渡	28.8	11.0	26.8	2.8	0.9
木原	28.7	10.9	27.3	3.4	0.7
江川	28.4	6.4	24.5	0.6	1.5
阿玉	28.7	6.3	25.5	0.6	1.5
帆津倉	28.6	4.6	26.2	0.7	1.4
権山	28.5	4.6	26.2	0.2	1.1
高田	29.1	6.2	29.1	0.4	0.9

6月中には 20℃以下の低水温が続き、前年並に冷たい夏が予想され、7月8日ごろから連日真夏日が続く。現在表面水温は 30℃も起っています。表一に代表地奥の水温溶存酸素量を示しました。各地奥とも底層では酸素が少なく、北浦の湖奥部では張網の魚が斃死するなどの現象がみられています。

水質に付いて

透明度をみると高投入を除いて高い値を示しており、ミズ沖や北浦では水が透明になっています。この原因は前回のかわら版にも書いておきました。20℃前後の水温で繁殖していたシネドラなどの珪藻プランクトンが水温上昇に伴って消失したため、水質が良くなったとは云えません。珪藻に変わって藍藻プランクトンのアオコが発生し、増殖中であり、ミニ4・5日は透明度が低くなるものと思われています。このようにみると、現在は霞ヶ浦北浦とも水変りれを起しているわけですから、網いけや養殖では給餌等には充分注意しなくてはなりません。例年ですと珪藻類が枯死し水変りを起す

北浦とも水変りれを起しているわけですから、網いけや養殖では給餌等には充分注意しなくてはなりません。例年ですと珪藻類が枯死し水変りを起す

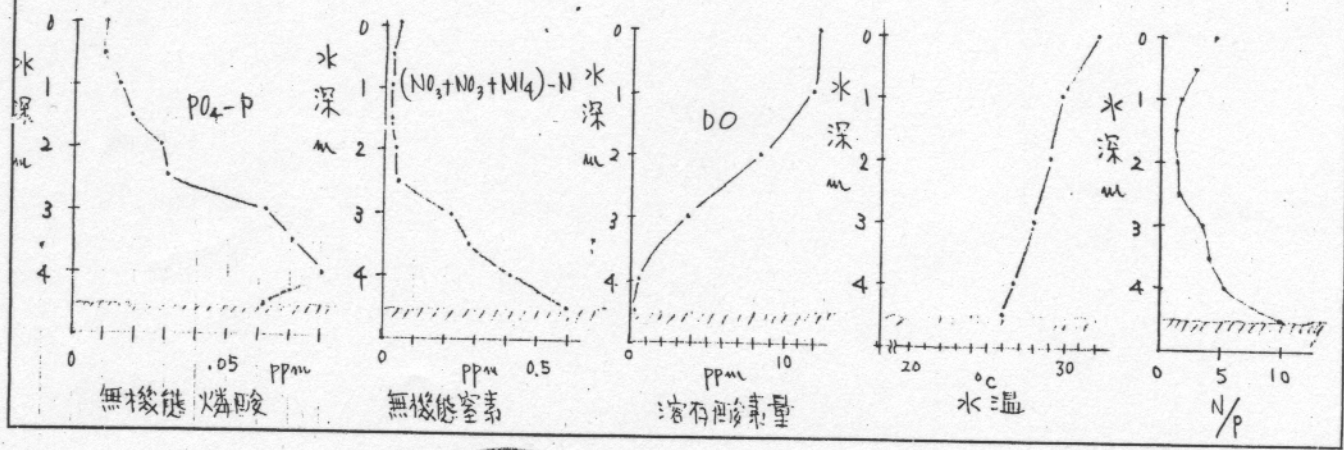
のは6月下旬です。今年の水変りは15日ほど遅くなっています。

7月下旬の水質は？
水質の悪い年は春にクロステリウムが発生し次にアナバナが発生しアオコが大量発生する。この型です。珪藻類からアオコに推移する型はアオコの異常発生が起りにくいものと推定されます。しかし、図一に示したとおり、無酸素状態の底泥部から窒素・燐の栄養塩の溶出がさかんに起っており、今月中には相当量のアオコが発生すると思われています。アオコが大量発生しているときの酸欠は底層に無酸素水塊が形成され、風により移動する時に斃死事故が発生します。網いけすでは注意が必要です。酸欠情報は内水試

酸欠情報は内水試

TEL
02995
151
0324

図-1 内水試沖の水質の垂直変化 (昭和56年7月17日 PM 2:00)



「今年のワカサギについて」

霞ヶ浦のワカサギの漁獲量は、過去五年間についてみると表1のようになっています。昭和52年を除いては不漁が続いておりヒリヒリです。

表-1

年	漁獲量 (ト)
昭和51	280
52	634
53	70
54	178
55	46

このように低いレベルにワカサギが果から推定するほどワカサギは冷感になりました。ニルが原因で、ワカサギの産卵期と孵化期におけるワカサギ稚魚の天然餌料であるワムシ類、コバホの調査を行いました。この調査は、データに代表される動物プランクトンの不足を考慮する必要があります。内水試行のデータは、ワカサギの資源量を推定する際の重要な根拠です。次に、ワカサギ稚魚の天然餌料であるワムシ類、コバホの調査を行いました。この調査は、データに代表される動物プランクトンの不足を考慮する必要があります。内水試行のデータは、ワカサギの資源量を推定する際の重要な根拠です。

表-2 N/群の量

年	個体数
昭和51	3600
52	2000
53	30
54	120
55	120

表1、表2の関係を動物プランクトンの多寡がワカサギの漁獲量と関係があることがわかります。このように、今年も三月に動物プランクトンの調査を行い、同じ採集方法で320個を採集しました。この結果がワカサギの資源量を推定する際の重要な根拠です。次に、ワカサギ稚魚の天然餌料であるワムシ類、コバホの調査を行いました。この調査は、データに代表される動物プランクトンの不足を考慮する必要があります。内水試行のデータは、ワカサギの資源量を推定する際の重要な根拠です。

表-3 稚魚捕獲数

年	(尾)
昭和55	2.8
56	1.5

次に六月に入ってからイササゴロ鬼網による調査を行いました。毎年、同じ場所、同じ距離を曳りて比較し、この結果がワカサギの資源量の推定に役立つことが期待されています。表4、表5による試験採集を行いました。その結果を霞ヶ浦、北浦別に、表6、表7に示しました。リザルトルによる20分間採集における漁獲量を表わしてあります。この試験採集結果を

表-4 漁獲尾数 (尾)

	54年	55年	56年
田村		3	
沖宿	1757		
崎浜		16	20
牛渡	183	27	47
三又		45	24
古原	11	2	222
麻生		23	246
手賀		49	257
浮島		19	
羽庄	12	48	420
商崎	972	51	
(平均)	489	28	176

昨年の約4倍の漁獲があり、オー、オニの調査結果とは異なりました。昨年の約4倍の漁獲があり、オー、オニの調査結果とは異なりました。昨年の約4倍の漁獲があり、オー、オニの調査結果とは異なりました。

表-5 漁獲尾数 (1ヶ所、20分)

	54年	55年	56年
大生	1171	155	12
水原	785	171	130
白浜	992	156	201
江川	506	48	527
馬渡	165	54	1350
徳山	878	387	3705
(平均)	750	162	1033

表-6 試験採集結果 7A8B

場所	漁獲量	体重
木原上	0	
下	4.65 kg	2.6 g
三又下	2.71	2.8
小津下	1.73	3.0
(平均)	3.03	2.7

オー、オニの調査結果とは異なりました。昨年の約4倍の漁獲があり、オー、オニの調査結果とは異なりました。昨年の約4倍の漁獲があり、オー、オニの調査結果とは異なりました。

表-7 実験結果 7A10A
試験結果

	漁獲量 kg	体重 g
大生 上界	0.91	2.8
下界	11.7	2.8
白波	3.7	3.0
江川	11.5	2.2
馬渡	23.8	2.1
(平均)	12.7	2.5

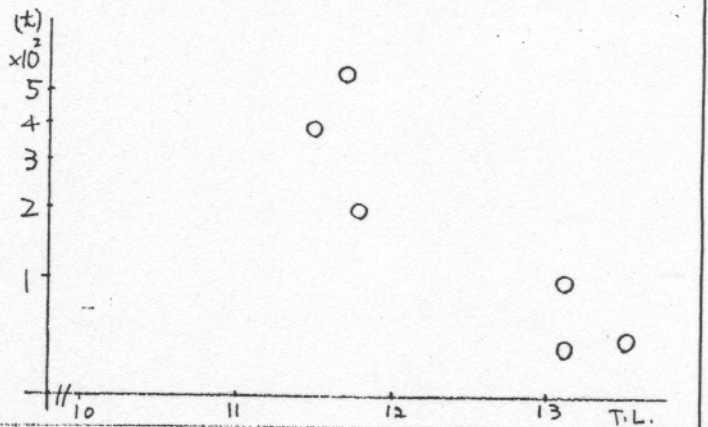
以上の結果を踏まえて今年の露ヶ浦のワカサギについて述べると次のようにいえると思います。昨年は総漁獲量が6トンと史上最低値を示しましたが、そのような最悪の年ではなりましたが、しかし、前述のように果がでています。二度の調査で述べた結果、動物プランクトンが少なくて多いうことが北浦のワカサギ資源を推定する際の判断の材料になります。ト直した環境がよるとはいえるけれども、したがって長い目でみるとやはりワカサギの不漁年と見えてしまふ。昨年との比較でも4.6倍、というニは、250トンの前後と見えます。ニには示しませんが、過去において試験操業と年間漁獲量の

関係から今年はよほど、250と300トンの見種も出ています。200と300トンの間に落ち着くかと思われまふ。北浦のワカサギについては、結論的に申しますと昨年並みの漁獲は見込まれないと思えます。イサガゴ身細

の操業結果では表5から明らかである。昨年の約4倍という数字が出ています。又試験操業の結果は、平均12.7kgと小さい。昨年の17.0kgと比べて、二度の調査で述べた結果、動物プランクトンが少なくて多いうことが北浦のワカサギ資源を推定する際の判断の材料になります。ト直した環境がよるとはいえるけれども、したがって長い目でみるとやはりワカサギの不漁年と見えてしまふ。昨年との比較でも4.6倍、というニは、250トンの前後と見えます。ニには示しませんが、過去において試験操業と年間漁獲量の

山手野。

北浦での魚体の大きさと漁獲量との関係



昭和56年度のワカサギ稚魚放流について、一般漁業者のこい稚魚池を利用したワカサギ稚魚放流は昨年より1件2池に続き、今年も5件7池において行われまふ。

その結果は次のようでありまふ。

池No.	卵数 (万粒)	ふ化歩留 (万尾)	放流稚魚 (万尾)	歩留 (%)
1	1170	585	35	6.0
2	810	405	5.8	1.4
3	330	165	74	44.8
4	600	300	23.5	7.8
5	690	345	-	-
6	420	210	50	23.8
7	300	150	-	-
計	4320	2160	188.3	平均 8.7%

以上のよう池によって大きな差があり、成績はあまり良くない。そのほか、施肥の方法等に課題が残されていようと思われる。なお、その間、池を提供していただきまふ漁業者の方々、関係各氏の皆様には大変お世話になりました。紙面にてお礼申し上げます。